

サラワク・シハン社会における森林資源の利用価値

—食物・現金収入としての利用に着目して—

加藤裕美（京都大学大学院 人間・環境学研究科）

マレーシア・サラワク内陸部では、大規模伐採に先立ち、森林内で遊動生活を行っていた狩猟採集民は定住し、焼畑農耕を開始することになった。これまで、このように定住した狩猟採集民は生活基盤となる森林の劣化にともない、貧窮化が問題とされてきた。しかし、市場経済の浸透にともない森林資源の獲得に有利な立場を持つ彼らの経済は一概に脆弱化したとは言いがたい。この点を明らかにするために、本研究では定住した狩猟採集民であるシハン社会を取り上げ、彼らの①生業、②食事、③現金収入について分析を行った。

その結果、以下のことが明らかになった。生業においては定住政策にともない、狩猟採集から焼畑農耕への大きな転換を強いられたというものの、基本的には狩猟採集に多くの時間が割かれていた。その背景には狩猟採集から得られる野生動植物、とくに狩猟で得られるイノシシやシカなどの動物肉が食べ物として重視されていることがあげられる。これに対し、政府の農業プロジェクトによって作られた菜園から採れる栽培植物は野生植物に比べ利用頻度、種類ともに圧倒的に少なかった。

また食事の面では、豊富多種類の野生動植物を食べ物として利用しており、それらは蛋白源として特に彼らに重要であった。摂取する食物全体の入手元を分けた場合、狩猟採集による野生動植物が全体の7割を占めていた。これに対し、農耕による食物は全体の2割を占めるに過ぎず、食物としても狩猟採集による野生動植物の利用が重要な位置を占めていることが指摘できる。

さらに、シハン人の現金収入の内訳をみていくと、高額で取引されるイノシシやシカなどの動物肉からの収入が最も多く、次いで魚や蛙など漁労によって得られる収入が多かった。次いでヤシの芽やドリアンなどの野生植物、そしてマットやカゴなどの林産加工物と、いずれも狩猟採集によって得られる森林産物が重要な位置を占めていた。これらから得られる収入の月平均は、この地域での一般的な賃金労働による収入を上回るものであった。このような安定した収入の背景には、周辺の焼畑農耕民からの恒常的な需要があげられる。

このように彼らは、周辺環境の様々な変化に対応しつつも、基本的には狩猟採集活動を継続することによって、周辺民族の中で森林産物の供給者として特化している。これらは、今まで語られてきた、狩猟採集民の貧困化とは異なる事例を提供するものである。